故 雀部高雄教授

UDC 92 (Sasabe)

雀部高雄君を悼む

江　上　一　郎

東大生産技術研究所教授雀部高雄君は，胆のう癌のため1967年6月19日未明，54才をもって逝去された．4年ほど前に2回胆石を患って入院され，その後はひとまず健康になり，昨年の生研小型溶鉱炉の操業試験の際には，元気一杯なところを見せられた上に，今度は思い切って手術を受けられたので，日を経ず元気な顔が見られるものとのみ思い込んでいた私どもにとって，たった2カ月の入院で不帰の客となられようとは実に意外な出来事であった．同君のきわめて高められた思索と研究が，やっと世界に向って迸りはじめた矢先だっただけに，同君を失ったことは生研にとっても国にとっても残念至極であり，また私どもにとって悲痛に耐えないところである．誠に惜しい人であった．

雀部君は，1912年（大正元年）に生まれ，成蹊高校理乙を経て，1936年（昭和11年）東大工学部冶金学科を卒業，すぐに日本製鉄の八幡製鉄所に入られ，製鉄研究に従事された．同君は16才頃から哲学に興味を持ちはじめ，“三枝博音先生のすすめにより，元素年表をつくり，この仕事が私の眼を開かせることになった”と記述されているように，製鉄所に入ってからも，従事された仕事を常に高い視野から眺め，“鉄学とともに技術の哲学に興味を持つ”ようになられた．これがその後今日に至るまでの同君の変わらぬ態度であり，狭い範囲の研究にも，常に高い次元の思考の裏付けがなされる出発点であったと思われる．製鉄所においても，そういう進んだ（少なくとも当時としては新しい）研究態度をもって仕事に臨まれたので“軸受鋼精錬の理論”を初めとして数々の業績を挙げられたのであるが，不幸にして胸を患われて製鉄所を去られることになった(1951年)．その前後の闘病と終戦の苦難の生活の中にあっても，“鉄学＝哲学”の道は忘れられず，さらに深く科学と技術，あるいは産業形態の探究に没頭していかれたようである．そしてその後健康の回復をまって千葉工業大学教授として大学教育に従事されるようになり，技術と教育の問題にも思いを重ねられて行かれた．おりから当時生研におられた金森九郎教授の手によって創設された生研小型試験溶鉱炉による製鉄研究に関連して，“鉄鉱石の還元機構に関する研究”に研究員として生研の研究に参加され，その後金森教授転出の後任として，生研の“鉄鋼製錬工学”の部門の担当教授となられた（1961年）．

生研に入られてから6年，実験室的な研究に幾多のすぐれた業績を残されたが，“小型試験溶鉱炉による製鉄の研究”については，まずその運営を円滑にするため研究所に“試験溶鉱炉委員会”の設置を提案され(1962年)，所内の種々の専門分野の教授および工学部の教授で組織される委員会を作り，各委員の専門的立場からの助言と鉄鋼協会試験高炉委員会の協力によって，研究がさらに強力にかつ効果的に進められるように力をつくされた．そして新しい態勢の下に委員会で決定した題目の操業試験を遂行することによって，毎次操業ごとに，溶鉱炉技術上独自の着実な基礎的研究が重ねられ，重要な実験資料と研究結果が学会に発表されるようになった．亡くなられた直後のこの夏に予定されていた第18次操業は，同君の提案によって，溶鉱炉送風限界の最終的な試験が行なわれ，遺志を継いだ研究室員の努力によって溶鉱炉操業上重要な成果が得られ所期の目的を果したのであった．

最近，同君は日本独自の製鉄法に強い関心を示し，日本古来のタタラ製鉄に目を向けられ，今までの広い学識と現場の経験の上に立って，新しい製鉄技術の確立に情熱を傾けはじめられたのに（日頃は言葉少ない同君がそういう話には，思いがけぬ熱弁ぶりを発揮されたことであった），それも今は，同君の胸の底をうかがうすべもなく，またその上に築かれるはずであった素晴しい夢を聞く日も来たらず，空しいものとなってしまった．同君は，生研の数多くの委員会の委員として，それぞれの立場において，立派にその任務を果されたが，特に昨年度は生研第4部の主任として，この3月までの任期を一杯に勤められた．その後半は，病がむしばみはじめたにもかかわらず，苦痛を表面に出さずにおして重責を果されたのであったということは，凡庸な私どもの後にして覚るところであった．

生研にも，学会にも，また製鉄業界にも，雀部君の見識と業績はさらに後進に受け継がれて，永久に発展していくことではあるが，これからこそ余人に代え難い一層大きな貢献がなされることと強く強く期待されていた同君であったのに．人としての奥ゆきの深い，そのゆえにどんな人にも愛され慕われる，静かな高い山々の姿をそのまま映している青い湖のような同君であったのに．誠に惜しい人を失ったものである．